
平和な翼

南里 こなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和な翼

【Nコード】

N4723N

【作者名】

南里 こなみ

【あらすじ】

主人公の少女が自分のことを思い出すために旅を始める。

魔法が織り成す不思議な物語。

未熟なので亀更新間違いなのですが、よかったですら見てください！

0、プロローグ

ここはドラゴンという生き物が生息し、魔法という不思議な力を使う世界。魔法を使い、ドラゴンと共に、戦いを繰り返す。火種は消えず1つの国以外のすべての国で争いが絶えない。

唯一の平和な国。その国の名は「ルナミ・シー」。

別名 ウィンドピース。平和な翼。その由来は、平和で国の形が翼に似ているということからだった。

全ての国で争いが後を絶たないというのに真ん中に位置するこの国は、どんな戦争にも中立の立場を決して崩さなかった。そして戦いを仕掛けられても、大きな争いにはならず人も死なないような小さな争いになる。それは仕掛けたほうも同じで、いつしか話し合いで解決してしまうほど小規模な争いといえるのかも分からない争い。平和という言葉が一番似合う国。

まるで、翼の形をした国自体がそう望んでいるかのようにその国に…地に足を踏み入れた者は戦意がいつしか消えていく…。

それほど平和で…のどかな国…。

「いつか自分の国も…」…そう願ってしまうほど平和なそこは訪れる人の心をいつの間にか癒すのだ…。

そこが「ルナミ・シー」だった。

『ルナミ・シー』

そこは、世界の中でもっとも平和な国。そして、もっとも優しい国と呼ばれていた。

だが、それは昔の話。昔は、『月』を『夜の守護神』、『太陽』を『朝の守護神』として大切にしていた。だが、『ルナミ・シー』の住人もやはり人間。いつしか人々の考え方も変わり始めた。『人が神』と考え始める者が始めたのだ。

その頃から『ルナミ・シー』の中でも小さな争いが起こり始めた。

そして、強大な魔力を持つ者が次々と平和を望む『ルナミ・シー』から世界に出て行くことになった。

世界は、大混乱に陥った。

そんな中、『ルナミ・シー』ではもつとも魔力が強い神子族と呼ばれる一族が世界の混乱を収めるため動き出した。神子族は『ルナミ・シー』に最初からいた人間の末裔で、『ルナミ・シー』の大半にこの一族の血が流れている。そのため、『ルナミ・シー』の人間はかなりの力を持っていた。

しかし、強大な魔力を持つ神子族達も普通の人でも同じ血を継いでおり、なおかつその中でもかなりの力を持つ者たちを前に、なす術が無かった。そして、強大な魔力を持つ人間たちはその醜い心で次々と争いを仕掛けたのだった。しかし、そこにある者たちが現れた。その者たちは決して名を名乗らなかった。ただ、自らのことを“シンウイスト”ルナミ・シーの言葉で『守護神らの加護を得た者』とだけ名乗り、戦いを止めるべく魔力を使った。その力は絶大だった。しかし、その力をもつてしても倒すことは出来なかった。争いに捕らわれた人は、もはや人ではなかったのだ。

人の形をしていても、心や力は悪魔のそれだった。さすがの『シンウイスト』でも倒せない…そこで、倒すではなく、生きたまま封印 という方法で一応倒すことが出来たのだった。そして、その日から『シンウイスト』は『真の神子』と呼ばれ『月』『太陽』と共に世界の人々から称えられたのだった。

それは、今から100年以上前の話。

今でも、世界では昔ほどではないものの争いが絶えなかった…。

0、プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

随分前に考えた話なので矛盾なども出てくると思いますが、どうぞよろしく願います。

1、自分の道と夢

快晴という言葉が一番似合う朝のことだった。「ソラリア・ワール」のジール大都市から少し離れたカーリアという町の、ある学校で卒業式が行われた。

世界一般的に、6歳から15歳までの9年間学校に通わなければいけないことになっている。そして学校を卒業したら、職に就いたり、勉学に励んだり人それぞれの道を歩んでいくことになる。つまり、学校を卒業したら一般的に大人ということなのだ。

因みに国を出るのも保護者の了承なしで出られたり出来るようになる。そのため、家出する者が後をたたないんだとか。

そして、卒業式が行われた次の日、一人の少女がカーリア駅の鉄道列車に乗ってこの国を旅立とうとしていた。

その少女の名前は「愛里 優月」。15歳の大人になったばかりの女の子だ。

彼女は普段「ソラ・シーク」と名乗っている。この「ソラリア・ワール」では、「愛里 優月」の名前は目立ってしまうからだ。

この国は、カタカナの名前の人が多く、大都市にはそれなりにはいるものの少し離れているカーリアでは、漢字の名前を持つ者はないに等しい。そのため、優月は悪目立ちしないために本名ではなくこの国でもおかしくない名前を作ってもらい、名乗っている。

優月は最初一人ではなくある人と共にこの町に来た。その人は、40代くらいの初老のおじさんで、優月が6歳ぐらいだった。しかし、気が付けば一人になっていた。そして、小さいころの記憶もあやふやになっていった。今、優月が昔のことで覚えていることといえば、自分の名前と 誰か と一緒に習った魔力の使い方と体術だけだ。誰に習ったのかも覚えていない。

そんなこんなで、優月がこの町に来てから約9年がたった。そして、

今旅が始まろうとしていたのだった。

...

「何処行きの切符をお求めですか？」

ぼーっと空に伸びる煙を眺めていた優月は、駅員の問いかけには
と我に返った。機関車特有のその煙が風に遊ばれてゆらゆらと空
に伸びる様は、見ていて飽きないのだ。

いつの間にか、前に並んで駅員に文句を言いながら切符を買って
いた初老の男性がいなくなっている。駅員が少し疲れた顔をしている
のを見ると先程までいたようだ。その様子に優月は少し苦笑しながら
考えた。

「…えつと…『ノルソーク』まで。」

優しい雰囲気を持つている若い駅員は優月の言葉に少し難しい顔を
した。

「…『ノルソーク』行きですか？…確か…。」

そう言うと、駅員は隣においてあったパソコンのキーボードを、カ
タカタと弾き出した。優月は一連の動作を不思議そうに見つめる。

「…ああ、やっぱり…」

そう呟くと、駅員が顔を上げる。その顔は少し申し訳なさそうな顔
をしていた。

「『ノルソーク』行きはこの時期混んでいてね…二人以上の席は
取れないんだよ…」

その言葉に優月は内心首を傾げる。

この人には私が二人に見えるのだろうか？

そんなことを考えながらどうしようか考える。

「…えつと…私一人なんで、一人分あればいいんですけど…？」

優月の言葉に駅員は眉をひそめた。

「大人の方は？」

駅員の言葉に今度は優月が眉をひそめ、内心で溜め息をついてまたか　と心中で呟く。そして、胸ポケットに手をつ込んだ。

優月の身長は15歳にしてみれば少し低く、よく歳を疑われるのだ。

「いませんか？…私これでも　15歳　なんで！」

15歳のところを強調しつつポケットに突っ込んでいた手をゆつくりと取り出した。

その手には黒い手帳が握られておりそれをかすかに開き中の紙の色をちらつかせた、15歳以上の義務教育が完了し大人と認められた者にのみ渡される『マジスバル手帳』という特殊な手帳を掲げた。

「な！？その歳で白紙しろがみとは…………いや、悪かったね。はい、ノルソーク行きの切符だよ。あ、そうそう…あんまり、手帳の中身は見せびらかさないようにした方良い。色を変える機能があるはずだから白以外の色にしないさい。良い旅を…気をつけてね。」

優しい駅員さんに見送られてその場を後にした。

この手帳には個人情報などの、全ての情報が記されている。そして、魔力・身分・成績などで色が分かれており、色が薄くなることにレベルが上がっていくという仕組みになっている。この場合白が最高ランクだ。

20歳を超えると稀にだが、白以外の色…金・銀・プラチナなどの色を持つ者もいる。

こういう者はたいいてい潜在能力がずば抜けており、戦争などの兵士、または教会などの聖職者など、人を殺したり、助ける仕事もらえる“カルト”と呼ばれる魔道師の組合に入るものが多い。

そして、そういうものに限って、社会に悪影響を与えと言われる、力の問題から人間関係がギクシャクしてしまうことがあるのだ。そのため、ある一定の色から上の手帳にはそういったことから持ち主を守るために色を変えることの出来る機能がついている。

先ほどの、駅員もこういった事情を知る者としてのアドバイスだったのだ。因みに、色の配分は全世界共通で、現在白から赤まで約1

0色の色が使われている。赤は「ノンマース」と呼ばれ、魔力が全くない者のみに与えられる手帳だ。白は上位3位以内には入っており、1つの国に白以上を持つことの出来る人間はわずか100人いるかないかと言われている。

この手帳 は2年ごとに試験をして、年齢ごとに変わる魔力の強さに対応できるようになっている。

そして、本当に稀にだが魔力が異常に強く様々な条件に当てはまった者だけに「現シンウイスト」として黒を持つことを許されることがあるのだ。

おや、そうこう話している間に優月の乗り込んだ機関車が走り出したようだ。

まあ、とにかくこうして優月の旅は始まった。

・・・

「すんませ〜ん！何かいるか〜い？」

田舎者丸出しの発音で現れた小太りの女性が売り物らしき物が入ったカートを押しながら回ってきた。どうやら、新手の商売人らしい。優月はチラッと目を向けたもののすぐに反らし、窓の外の流れ行く風景に目を向ける。

『ソラリア・ワール』に来てから外に出たことのない優月にとっては、どれもこれも初めてみる風景といっても過言ではない、そもそも優月には小さい頃…つまり、『ソラリア・ワール』に行く前の記憶など無に等しかった。

そんな優月がこの旅を決意したのにはある理由があった…。それはとても大切で、そして難しいこと…。

優月が、『ソラリア・ワール』を出る決意したのは、ほんの1ヶ月ほど前だった。

「ソラ！ソラはこの学校でたらどうすんの？」

風が通り過ぎるように流れて行く風景をボーッと眺めていた優月の

耳に、学校で一番仲の良かったリーザンの声が響く。

その時は答えることが出来なかった。でも、今なら…

心の中で呟いて優月は真っ青な空に目を向けた太陽がモロに視界に入り、思わず目を細めて手を目の上に翳した。そして続きを心の中で呟く。

今ならば、答えることが出来る。私は、自分の記憶を…失ってしまった過去を取り戻す！そして、自分の生きている理由を…役目を見つける！！

優月の呟きは誰にも聞かれることは無かった。だが、確かな力がこもっていた…それは、優月の瞳のように揺るぎ無い決意…そして強い意志…。

しかし、優月がその決意をリーザンに告げることは無かった…。リーザンには、この旅について何も告げずに町を出たのだ。

出てしまった今でも後悔はしていない。優月が使っていた部屋は買ったものだから売るのは時間がかかるため、売るのは諦めて大家さんであるジゼル・ゴートさんに頼んできた。そのため、ジゼルさんに優月のことを聞けば答えてくれるはずだ。

リーザンは優しすぎるからな…。

そっと呟いて、首を振る。

「何をやってるんだ優月、これじゃあリーザンに言わずに出てきた意味が無い！」

優月自身に言い聞かせるように、自らの心に語りかけるように、呟

いた。隣には補聴器をつけたお年寄りの女性が座っているためとても小さな声で言えば聞こえることはないだろうと考えての行動だった。

ちらりと隣を見て、相手の反応を窺う。こちらの様子に気付かないところを見て優月はそつと肩の力を抜いた。そしてまた、窓に視線を戻して思考を巡らせる。

これからはリーザンも私もみんな違う道を歩いていくんだ！

そう自分に言い聞かせていると、隣から声を掛けられた。

「お嬢さん。どうしたんだい？ そんなに真剣な顔をして…。」

突然のことにとっさに優月は横に振り向く。

そこには、先ほどちらりと目を向けたおばあさんが優しい顔でこちらを見ていた。

「え、えつと…」

返答に窮していると、おばあさんは笑みを深くして優しい声で告げた。

「どうやら、何かを耐えている顔をしているねえ。さては、大切なモノを置いてきたのかい？」

随分と鋭いおばあさんの問いに、思わず優月の顔が引き攣る。

「ハハハ！ 凶星かい？ …なるほど、じゃあそれを後悔していると見た。」

まるで、子供が新しい玩具を手渡されたときのように、心底楽しそうにおばあさんがグイッと顔を近づけて聞く。優月は身を少し引いて一瞬の間固まってからあわてて否定した。

「後悔はしていません！ だって、リーザンは…いえ、なんでもないです。…と、とにかく私は、後悔はしていません！」

思わず口に出してしまい、あわてて口を閉じる。

私は、何を言ってるんだろう…。思わず、リーザンに言わなかった

た理由を見ず知らずのおばあさんに告げてしまつところだった…。
気をつけないと！こんなに口が軽いときつとこの先やっていけない
…。

自分に言い聞かせて反省していると、優月の言動を面白そうに見て
いたおばあさんがそつと口を開く。

「素直な娘だねえ…。でも、あんまり自分を追い詰めないようにし
なさい。…後悔してないんなら、そんなに暗い顔をしなさんな…置
いてきた者に恥じないようにピンツと背筋を伸ばしてしつかり前を
向きなさい！もう二度と会わないつもりならなおさら前をしつかり
見て歩き続けなされ…」

おばあさんはそういうと優しい笑みを浮かべた。

おばあさんの言葉は優月の心の中に一つの光となって入ってきた…。
とても弱いけど…でも、とても温かい優しい光…。

そう、だった…私は、何も言わずにあの町を…出てきた…。

「…そう、ですよ…ね。」

優月が小さな声でおばあさんに答えた。とてもとても小さな声で耳
の良い人でも聞こえるかどうかぎりぎりの声だったにも関わらず、
おばあさんは笑みを深めて大きく頷く。

「それでいいんだよお…ところで、お嬢ちゃんの名前はなんていう
んだい？」

突然のことに驚きつつ、名前を答える。

「ゆつ優月です…あ。」

咄嗟に右手で口元を軽く押さえるが、おばあさんにははっきりと聞
こえてしまったようだ。

やっぱ…私のバカ…！

内心で自己嫌悪に陥っていると、おばあさんが先ほどと変わらない声で話しかけてきた。

「ユヅキか…変わった名前だが、田舎の出かい？」

どうやら漢字の名前だとは気付かれなかったようで優月は一応安心した。

「えっと、ジール大都市から少し離れたカーリアという、小さな町です。」

おばあさんの問いに素直に答えるとおばあさんはまるで孫の話を聞くかのようにうなずいた。

「そおかい…カーリアかい…」

何かがあったのか、少し考えるような目つきになった。

優月は少し気になったが、おばあさんの雰囲気気おされて聞くことは出来なかった。

それからは、おばあさんの旅の話を聞かせてもらいながら時を過ごした。

...

「おんや、そろそろバストジークだねえ。」

おばあさんの言葉に驚き、優月は窓の外に顔を向ける。

バストジークは、ノルソークから考えるとまだもう少し前だが、カーリアから考えると機関車でも3時間はかかるところだ。

もう3時間も…

「時間がたつのって速い…ですね…」

顔を外に向けながら言うとおばあさんは笑いながら「そうだねえ」と答えた。

「誰でも何かに集中している時や楽しいときは早く感じるものさ。

…ユヅキはそういう経験ないのかい」

優月はおばあさんの問いに素直に頷けた。

リーザンと一緒にいる時は時間がたつのが凄く速く感じたっけ…

そんなことを考えながら学校での事を懐かしく思い出していると、おばあさんの顔が視界入った。

「また、大切なモノについて考えていたね。」

おばあさんは笑っているが少し困ったような顔をしている。

「え、ええ…少し…」

優月が少し戸惑いながら答える。

「……………優しい友達だったのかい？」

おばあさんの言葉に優月は驚き顔を上げた。

おばあさんの目は何処までも優しく…でも、まるで水晶かガラス玉のように透き通っていた。そんな目にみつめられるとまるで心も見透かされている気がして、優月は居心地が悪そうに視線をそらすために頷きながら俯いた。

その様子におばあさんは一瞬だけ苦笑をしてからすぐに優しい笑顔を浮かべた。

「…そおかい。…だが、置いてきたんだろう？巻き込まないために…」

どうやらおばあさんには、優月の心は見透かされているらしい。優月は素直に頷いた。

「相手には相手の夢があった。…そして、相手は友達のためならその夢さえ捨ててついて来てしまっ、優しい子…だから、それこそ何も告げずに悟られないように置いてきた…そうだろう？」

優月はただただ頷き続ける。

「…もう一度聞くよ。…ユヅキは後悔しているのかい？」
おばあさんの言葉に優月は一瞬震えた。

後悔・・・？

「…後悔は……………」

…してない…なんていえない…。だって、だってあの町は…

優月はぎゅうつと目をつぶった。

「後悔しているんだね？」

おばあさんの言葉に優月は微かに頷いた。

……たしかに、…確かに後悔している…でも…

「…でも、帰りません…」

優月はそういうと顔を上げた。

「だって、リーザンにはリーザンの…そして、私には私の…夢があるから…」

おばあさんにはつきり伝えると、おばあさんの目が先ほどよりも優しい色に染まった。

「そおかい…夢かい…」

「はい。…夢、です…」

「だったら、夢に向かって歩きなされ。そのために故郷と友…全てを置いて来たのだろう？」

そついうとおばあさんは立ち上がった。

「おばあさん？」

不思議そうに見上げる優月におばあさんはもう一度優しく笑った。

「私はバストジークで降りるよ。…ユヅキは大丈夫…夢に向かって歩きなさい。…お前さんが知りたい事は、この旅の先にある。そして、…なぜ1人になったのかも…」

「え？」

おばあさんの言葉に優月は目を見開いた。機関車がゆっくりとスピードを落とし始める。

「また合おう、ユヅキ」

そついうとおばあさんは歩き始めた。

「はい、…ありがとうございます」

優月がそついうとおばあさんは何かを思い出したように振り返った。

「そつそつ、ユヅキ。仲間を作るのもいいことだよ」

そつ言つておばあさんは片方の目をつぶつてウインクをした。

「え、あ、はい…?」

優月の反応に面白そつに、笑いながらおばあさんは機関車を降りていった。

「…なんだつたんだろつ…。」

呆然とおばあさんを見送りながら呟いた。

でも…正直おばあさんの言葉に救われた…。私は夢のために…私自身のために旅をしよう!…リーザンにはリーザンの、私には私の夢がある…。後悔は…少ししてるけど…。お互いの、私の夢のためにはこの方が良かったんだよ…。夢が叶ったそのときに私はリーザンに謝りに行こう!

優月はこうして、自分の心に誓つたのだった。

始まりの町ノルソークまで、あと少し

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4723n/>

平和な翼

2010年10月28日08時02分発行